

ソウルの巨大デモ

おおた しんぺい 民博 民族文化研究部
太田 心平



デモは「暴動」か「祝祭」か。ひとつの出来事に対する人びとの認識や描き方は、視点の置きようにより千差万別である。フィールドワークによる経験は、その多面性に気づかせてくれる。

立ち上がる若者

二〇〇八年五月、ソウルにあの光景が帰ってきた。旧市街の大通りを埋め尽くす群衆の渦である。
右派政権の李明博(通称「MB」)は、左派勢力による厳しい批判を受けながらも、この年の二月、大統領に就任した。新しい政策に対する、国民の特に若者層の反発が、日ごとに増していた。

そんななか、高校生たちが立ち上がった。直前までの左派政権では禁止されていた中高生の「零教時」、つまり一時間目よりも前に生徒を登校させ教室で自習をうながすことを、MB政権が解禁したことに抗議したのだ。こうして四月の各週末には、百名以上の高校生が光化門や清溪川一帯でキャンドル・デモを開いた。

五月に入ると、このデモには高校生以外にも参加するようになった。狂牛病問題で輸入が禁じられていた米国産牛肉の輸入再開が発表されたことで、反MBの声が高まったのである。こうして、「李明博弾劾のための汎国民運動本部」という組織がデモの運営にあたるようになった。ソウルだけではない。同じ動きは、すべての大都市へ、そして中小の都市にまで広がり、週末ごとに韓国の繁華街はデモ一色になった。いちばん流行ったスローガンは「MBアウト!」。このあたりに、イマドキの感覚がよく出ていた。

デモの実像を知るために

わたしは二〇年近く韓国の政治文化を研究している。しかし、そんなわたしにとつてさえ、こうした巨大デモに参加することは慎重さを要する。実際に、日本の外務省は、旅行者を含む海外の邦人に、政治集会に近づかないよう警告している。ただ、このときは現地の専門家と緒に行動することと、「前線」に近づかないことを条件に、研究のためデモに混じってみることにした。

わたしが気になったのは、政治色の重さと、お祭り要素という軽さのバランスである。事前に話を聞いた若者たちは、口をそろえて「六年前み



たいで面白い」というようなことを言っていた。二〇〇二年の日韓ワールドカップで、大通りを埋め尽くして街頭応援がおこなわれたことと、やっていることに共通点があるというのだ。右派のマスコミも、迷惑なお祭り騒ぎだと、デモを激しく非難していた。
しかし、それならばそれで、さらに研究すべきなのである。本誌の二〇〇八年六月号でも書いたが、日韓ワールドカップの街頭応援も、結果的に国民の団結という政治的幻想に支えられていた。また、街頭応援に向かう民主化学学生運動世代の人びとは、しばしば九八〇年代のデモ現場を思い出するために、街頭応援に参加していたほどだ。いずれも、群衆の二重スを見ていただけでは伝わってこない、一人一人の実情だった。

国史認識をつなぐデモ

こうして六月二四日の土曜日に、わたしは一日かけて旧市街を歩き、人びとの声に耳を傾けた。厳しい面持ちでシュプレヒコールをあげる人びとから、このデモの真摯な側面は十分に伝わってきた。ただ、夜になって涼しくなると、もう少し軽い気持ちで参加する人びとが目立つようになった。友だちどうし道路に座りこみ、おしゃべりに興じる小さな集団。その合間を物売りが歩き回る。たしかに「お祭り騒ぎ」としての一面もあった。

そんな夕刻の大通りでわたしが着目したのは、中高生とその親たちのグループだった。「お父さんが大学生のころにはね」と、民主化学学生運動の思い出を子どもに話す父親。「八〇年代のデモにも、娯楽要素がなかったわけじゃないのよ」と語る母親。そんな話を聞く子どもたちの、キラキラした目。週末このデモは、一年以上も続いた。強まりゆく警察による武力鎮圧と、堅調な経済政策によりデモは収束したが、国民はその光景に軍事独裁時代の再来を見た。MBの次に政権をとったのは、かつての軍事独裁政権の大統領の娘である朴槿恵現大統領。現政権下でも、巨大デモはしばしば起き、



- 上: 米国産牛肉の輸入再開に反対するデモを呼びかける横断幕
- 中: 諸政策を非難する「MBアウト」の横断幕
- 下: 警察が築いたバリケードの前で演説を聞く人びと。乳幼児を連れた人もいる



「民主化」以前の悪夢と比較する発言は続いている。

反MBデモは何だったのだろうか。参加者の規模でいって最盛期の民主化運動をも凌駕したとする分析や、暴力的な部分を指して暴動だったと非難する記録、参加者の自発性や秩序意識を称えて民主主義のバージョンアップだったという評価など、評者の思想に沿う多様な認識として、現在では人びとに記憶されている。やがて、それぞれの思想に基づく歴史の物語に吸収されていくだろう。そういうマクロな視座に立つ人びとにも、あのパパやママの思い出話や、子どもたちの目が、見えていればなと願う。わたし自身は、久しぶりにソウルで起きたあのデモを、「民主化」の前後をつなぐ伝承行為だったと位置づけている。